月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.13



ファルコム jdk バンド・ドラマー
岡島俊治入魂の新連載コラム
人生半キャラずらし

ヨナが招いた廃地の結末は!?
英雄伝説 零の軌跡
ショートストーリーズ

ついに動き出したクーデター
その時レーヴェは……!?
空の軌跡外伝
レーヴェ物語

ザナドゥ最弱チキンレース開幕!?
みんな集まれ！
ファルコム学園

ティオの
ファルコムラジオ
めんどくさいです…
でもがんばります
の舞台裏

英雄伝説 零の軌跡
Evolution
情報課通信

英雄伝説 空の軌跡
THE ANIMATION
遊撃士協会 アニメ支部

Falcom FanArt Collection

新連載スタート記念！ 巻頭特集

著：むらさきゆきや
イラスト：窪茶

英雄伝説 零の軌跡
～午後の紅茶にお砂糖を～

アフタヌーンティー&シュガー



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

英雄伝説 零の軌跡
～午後の紅茶にお砂糖を～

【アフタヌーンティー&シュガー】



著：むらさきゆきや
イラスト：窪茶

第1話 『ティオとみっしぃの日』

やわらかな陽射しの降り注ぐ昼下がり。

早朝から任務に出ていたロイドは、ようやく特務支援課へと帰ってきた。昼食は取りそこねたけれど、ティータイムには間に合いそうだ。

リビングとしても使っている会議スペースに顔を出す。

「やあ、ただいま」

ロイドの声に、テーブルを囲んでお茶をしていた三人ともが、顔をあげる。

赤毛の青年――ランディが、ビッと片手を振った。

「よおっ、遅かったな！　どっかのお嬢さんと、お楽しみだったか？」

「お嬢さんではないけど、荷物を届けた先でね……」

「ほう!?」

「お婆さんの話が終わらなかったんだ」

「それは、お楽しみじゃねえよ！」

「ロイドは真面目なのよ、ランディと違ってね」

ため息まじりに肩をすくめたのは、パールグレイの長髪が美しい少女――エリィだった。

その隣に座っていた少女が、席を立つ。

「ごちそうさまです」

ライトブルーの髪に白い肌――ティオは、まるで子どものように見える。実際十四歳でしかなく、本来ならば特務支援課の危険な任務に参加するような年齢ではない。

しかし、彼女は魔導杖（オーバルスタッフ）を使いこなす実力者だ。

ティオは半分ほどミルクの残ったマグカップを持つと、ロイドの横を通り過ぎていく。

「…………ジト」

「え？」

すれ違いざま、睨まれたようにロイドは感じた。

自室へ戻ろうとするティオに、エリィが声をかける。

「ティオちゃん、明日は何時に出る？」

「……午後は混雑すると思います。朝食のあと、すぐに出発しましょう」

「そうね！　そうしましょ」

「はい」

いつも無表情でクールなティオだが、仲間に見せるやわらかい微笑みを残して、会議スペースから立ち去った。

ロイドは入れ替わるように座る。

エリィが紅茶と――昼食抜きを察したのか、パンケーキを切ってくれた。

「ありがとう」

「これ私とティオちゃんで焼いたのよ」

「そうなんだ、美味しそうだね。そういえば、エリィたち、明日どこか行くのか？」

「ええ、私たち非番だから、ティオちゃんとお洋服を買いに行こうと思って」

「なるほどね……じゃあ、べつに機嫌が悪いってことはないのか……俺の気のせいだったのかな？」

「どうかしたの？」

「うーん……さっき、ティオに睨まれたような……？」

ほほう、と身を乗り出したのは、ランディだった。

ニヤリと笑う。

「そういや、最近、ティオすけがロイドにだけそっけないよな～」

「うっ……やっぱり？」

他の人までそう感じるということは、自分の気のせいではないのだろう。

「もしかして、ティオすけに何かしちまったのか？　あんなこととか、こんなこととか!?」

エリィがテーブルを叩く。

「冗談でしょ!?　まだティオちゃんは、子どもなのよ!?　あ、子どもじゃなければいいってわけじゃないけど……とにかく、ダメよ！　そんなの」

子どもなんだから――とエリィは強調する。

ロイドは首をかしげた。

「俺はティオのこと、子どもだとは思ってないけど……？」

「えっ!?　まさか、ロイド……本当に……!?」

エリィが唇を震えさせる。

ランディまで驚いて目を見開いた。

「おいおい、マジかよ……!?」



そんな反応をされるとは意外だ。

「ふたりとも、どうしたんだ？　ティオは一人前の支援課メンバーだろ？　大人と同じように接するべきだと思うけどなあ」

　エリィがパタパタと手を振る。

「あ、そうよね！　そうね！　ティオちゃんは立派な支援課のメンバーだものね！」

　ランディがうなだれていた。

「まぁ、ロイドだもんな～。どうせそんなことだろうと思ったぜ」

「な、なんだよ……俺、変なこと言ってないだろ？　それより、ティオのことだよ」

「そうだな。まぁ、そんなに難しいことじゃない」

「わかるのか、ランディ⁉」

「ロイド、よく聞け――何もしてないのに女が冷たいときの理由は三つしかない！　気づかず傷つけることを言ってしまったか、何かして欲しがってるのに何もしないからか、約束を忘れてるからか、浮気が見つかったかだ！」

「三つしかないと言いながら四番目があるうえ、それは俺とぜんぜん関係ないと思うけど……」

「数字なんて細かいことさ」

　おおざっぱな性格のランディだった。

　エリィが思案顔をする。

「ん～……ロイドってとんでもなく鈍いところがあるけれど、傷つけるようなことは言わないと思うわ」

「じゃあ、決まりだな！　何かして欲しがってるのに何もしないからだ！」

「何かって？」

　ロイドの問いに、ランディが口ごもる。

「つまり、ナニカというのは……ええっとだな……はぁ、どっちもお子様みたいなものだし、その線はないよな」

「その線？」

「もう、ランディはバカなことばかり言って……あとは、約束を忘れてるとか？　ロイドに限って、そんなことないわよね？」

「約束か……忘れたりはしてないけど、まだ果たせてない約束ならあるかな」

「そうなの？」

「ああ、前にティオと、『ふたりでミシュラムのテーマパークに行く』って約束したんだ」

「は⁉」

「でも支援要請は尽きないし、非番が重なっても、なかなか休めなくて……」

「待て待て！　非番の日でも仕事してるな～とは思ってたけ

ど、そんな約束を放ったらかしてたのかよ!?」

「ふたりで行くって、どういうこと!? ティオちゃんとふたりっきり!? ティオちゃんとロイドだけでテーマパークに行くの!?」

いきなり詰め寄られて、ロイドはひっくり返りそうになる。

「あ、ああ……」

すべて肯定だった。

突き飛ばされた。

派手な音をたてて床に転がる。

「イテテ……何するんだよ?」

「それは、こっちのセリフだ、馬鹿野郎！ いいかよく聞け！

女の子との約束は緊急支援要請にも勝る!!」

ずどーん、とランディが断言した。

「なんだって!?」

ロイドの背後で雷が鳴った——気がした。

エリィがため息をつく。

「それは言い過ぎにしても、さして緊急でもない仕事より後回しにされてたら、約束を守る気がないか、忘れてると思っちゃうわね……ティオちゃんがかわいそうになってきたわ」

「いや、俺は忘れてたわけじゃなく、プライベートなことよりも仕事を優先しないといけないと思ってさ。だって俺たち特務支援課っていうのは、この街（クロスベル）の平和を守るためのものだから……」

「女の子の幸せより優先すべき平和なんてない!!」

ふたつ目の雷鳴だった。

「非番を代わってあげるから、今からティオちゃんを誘ってきたらどう?」

「そんな、エリィ。悪いよ」

「私よりティオちゃんに悪いでしょ。ずっと待たせてたなんて」

「うっ……わ、わかりました」

「今すぐ！」

「は、はい！」

そのようなわけで、ロイドはティオを連れて、ミシュラムワンダーランドに行くこととなった。

翌日——

水上バスの扉が開くと同時に、ティオが桟橋へと降り立つ。

すたすたと正門へ向かった。

クールを装っているが、脇目もふらず、歩みも明らかに早

い。

「ロイドさん、ミシュラムです」

「あ、ああ……」

それは当然なのだけれども、瞳を輝かせているティオを見たら、ロイドは何も言えなくなった。

つまり、自分の考えている『ミシュラム』と、ティオの言っている『ミシュラム』は重みが違うのだろう。

ロイドは出発前にランディに言われたことを思いだす。

「いいか？ 女の子を連れて行くってのはな、ただ行けばいいってもんじゃない」

「えっ、そうなのか?」

「その場所で楽しい思い出を作ってこそ、だろうが」

「楽しい思い出……」

「ああ、一生モノの楽しい思い出だ」

「一生モノの!? なるほど、ティオと約束したときは、そんな簡単なことでいいのかと思ったけど……俺が甘かったようだ」

「百戦錬磨の俺が、ばっちり教えてやるよ」

「ありがとう、ランディ」

そうして、空が白むまで〝一生モノの楽しい思い出〟の作り方を教わった。

「よし、今日は気を引き締めていかないとな」

「どうかしましたか、ロイドさん?」

「あ、ええっと……まずは入園チケットを買わないとね」

「それなら大丈夫です。この日のために、ＭＷＬ（ミシュラムワンダーランド）ワンダーフリーパスを買っておきました。すべての施設で自由に遊べて、ランチとドリンクまでついてきます」

「え？ それだと、俺が連れてきてもらったみたいになっちゃうけど……」

「……はっ!?」

「もしかして、ずっと楽しみにしててくれた?」

「そ、それは……当然です」

「……ごめんな、待たせちゃって」

「いえ、わたしの一方的なお願いでしたから。あと、勘違いしないでください……わたしが楽しみにしていたのは、みっしぃに会えることですので」

「うん？ それはわかってるよ。ティオは大のみっしぃ好きだもんな」

「……全然わかってません」

「え?」

すたすた、とティオが足早に進んでしまう。

もしかして機嫌を損ねてしまったのだろうか？ ロイドは

小首をかしげる。

――なるほど、こいつは難度の高いミッションだ。

小さく拳を握りしめると、ティオの後を追いかける。非番ということで装備（トンファー）は置いてきた。武器が役立つ状況とは思えないが、それだけに心許なかった。

ロイドたちはゲートをくぐり、ワンダーランドの奥へと進んでいく。

ふたりの後ろに、距離を置いて物陰に隠れつつ尾行する者の姿があった。

ランディである。

彼と一緒にエリィもいる。それに、支援課で面倒を見ている身よりのない女の子――キーアもいた。

ランディは懐からオーブメントを取り出した。多様な機能を持った第5世代戦術オーブメント、通称《ＥＮＩＧＭＡ（エニグマ）》は、通信機能も備えている。

「こちら、ランディ……目標はミシュラムに入ったようだぜ」

スピーカーから流れてくるのは、彼らの上司であるセルゲイ課長の声だ。

『対象の様子はどうだ？』

「今のところ、手もつないでねぇな。現在、正門から鏡の城方面に向かって移動中」

『この支援要請の重要度は**緊急**だ。最優先で当たってくれ』

「了解！」

鋭い返事をし、ランディはエニグマを懐に戻した。

エリィが目を丸くする。

「これ緊急なの⁉　ていうか、支援要請なの⁉」

「そうだ」

「本部に報告されちゃうの⁉」

「……依頼者は、ロバーツ主任らしいぞ」

「頭痛がひどくなりそう……」

ロバーツ主任とは、ティオの出向元であるエプスタイン財団の研究者で、彼女の上司にあたる人物だ。

あっ、とキーアが指さす。

「ロイドたち、アイス食べてる！　いいな～、キーアも食べたい！」

「着いて早々に食べ物かよ……どういう段取りしてんだ、あいつらは？」

「ねえねえ、キーアもアイス食べたい」

「ついて来るならワガママ言わないって約束じゃなかったか？」

「ううぅ～……」

涙目になりながらも、キーアは下唇を噛んでがまんした。

ランディが肩をすくめる。

「しゃーねえな、後で買ってやるから。な？」

「ホント⁉　ランディ、やさしい～」

「あら、ごちそうさま」

「お嬢もかよ⁉」

ロイドたちは、みっしぃアイスを食べていた。

みっしぃをイメージしたグレーとホワイトのツートンアイスに、みっしぃの絵がプリントされたクッキーが乗っている。

「おいしいかい、ティオ？」

「はい……何より食べることができてよかったです。このみっしぃアイスは期間限定のうえ、１日３４４個限定で昼にはなくなっていると評判でした」

「なるほどね」

だから、まず最初に来たというわけだ。

ランディには、休憩するのは三つくらいアトラクションを回ったあとがいいと言われたけれど、ここは臨機応変に対処して正解だったろう。

味は普通のアイスだったように思うけれど、ティオが喜んでくれたならよかった。

「さて、どこへ行こうか」

ロイドは周りに視線を巡らせる。

ミシュラムのテーマパークは、楽しげな施設がいっぱいあった。先が長い。

そのなかでも目を引くのは鏡の城だろうか。

たたっ、と急にティオが駆けだした。

「え？　ティオ⁉」

「ロイドさん、みっしぃです！」

見れば彼女が駆けていく先には、みっしぃがいた。

こうして、着ぐるみに瞳を輝かせる姿は、歳相応の子どもにしか見えない。

こんなに喜んでくれるなんて、連れてきてよかったな、とロイドは思った。

「なにしてるんですか、ロイドさん！」

「え？」

見れば、カメラを持ったスタッフが待っている。

ティオのほうも、みっしぃの横に立って、髪を手櫛で直したりして、準備万端だ。

「記念撮影です」

「ああ、そうか。え、俺も写るの？」

「当然です……ロイドさんと来た記念なんですから」

「なるほど」
「ロイドさんは、そこ。動かないでください。みっしぃが隣で、わたしがその隣です」
「はい」
「みししっ★」
テキパキとしたティオの指示に、ロイドもみっしぃも軍隊の兵士みたいにビシッと従う。
みっしぃを中心に、左右に並んだ。
バックは鏡の城。
太陽は右上に輝いている。
なるほど、こだわりを感じさせるポジショニングだ。
スタッフが声をかけ、パシャリとカメラのシャッターを押した。帰りに正門の近くで受け取れるらしい。
「この写真、大切にします」
ティオが表情をほころばせ、熱っぽく語る。その相手は、みっしぃだったが。
「みししっ、楽しんでいってね！」
「はい」
みっしぃが、ぽむぽむとティオの頭をなでる。
いつものクールな表情のまま、頬を紅潮させているのが、なんだか微笑ましかった。
背後から甲高い声があがる。
「おっ、みっしぃだ！」
「わーい、みっしぃだ～!!」
小さな子どもたちが駆け寄ってきた。
ティオは名残惜しそうにしつつ、みっしぃから離れる。
みっしぃはMWLの大人気マスコットで、もう記念撮影も終わったのだから独占するわけにはいかない。
それでも、すこし離れたところから、その姿を見つめ続ける。
走ってきた男の子ふたりが、みっしぃに体当たりした。抱きついたのかもしれないが。
「うおー、おれ知ってんぞー、みっしぃって、中に人いるんだろー!?」
「見せて見せてー!!」
「みししっ、そんなことないよ～?」
「でも、父ちゃん言ってたもん！」
「言ってたー!!」
「みしし……」
スタッフまで弱り顔だが——教育方針は、ご家庭により様々だから仕方ない。やや無粋だとは思うけれど、とロイドは肩をすくめた。
「みっしぃも大変なんだな、ティオ」
感情の消えた顔をした彼女が、つかつかと歩いていく。
「……」
「えっ、ティオ?」
「あなたたちは、間違っています」
いきなり子どもたちに説教をしだした。その威圧感に子どもたちがたじろぐ。
「だって……父ちゃんが……」
「それは嘘です。みっしぃの中に人など入っていません」
「じゃあ、どうしてしゃべってるんだよー!?」
「みっしぃは、しゃべるものです。当然でしょう。なんの不思議もありません」
ティオが本気で舌戦をはじめてしまった。
説得できればよかったけれど、そうそう都合よくいくはずもない。
「んじゃあ、みっしぃの頭を取ってみようぜ！ そしたら、わかるだろー!?」
「……ッ!!」
無表情だったティオに怒気が宿った。
すっ、とリュックのなかに手を入れる。
ロイドがトンファーを置いてきているように、ティオもまた今日は魔導杖を持ってないわけだが。
その手には、戦術オーブメントが握られていた。
「エニグマ、駆動……」
ティオが魔法(アーツ)の準備に入る。
「待った！ 待った！ ティオ、もう行こう！ そうだ、鏡の城に行ってみようか！」
慌てたロイドは、彼女の手をつかみ、引っ張って連れ出した。
「君たちも、みっしぃを困らせちゃダメだぞ!? じゃあね！」
ティオの迫力に涙ぐんでる男の子たちと、ゆるゆると手を振るみっしぃと苦笑するスタッフを残してロイドたちは鏡の城へと向かった。



離れたところから、その様子を眺めていたのは、三人——ランディ、エリィ、キーア。
「ねえねえ、ランディ」
「なんだ、キー坊？ まだアイスは無理だからな」
「みっしぃの中に人なんて入ってないよね？」
「え!? あ～いや、それは……まぁ……いないような、そうでもないような……」
「だって、みっしぃはみっしぃでしょ？」
「ああ、そうだな……そうだといいな」
ランディが、キーアの純真な瞳に苦悩していると、ハッと

エリィが息を呑んだ。
「大変！」
「どうした、お嬢!?」
「ロイドとティオちゃんが……!!」
慌ててランディは、草むらに身を隠しつつふたりへと視線を送る。
まだ不服そうなティオを引きずるようにして、ロイドが鏡の城を指さしていた。
エリィが声を絞り出す。
「手……つないでる」
「……ああ、そうだな」
「つないでる……」
「まぁ、テーマパークだしな」
手くらいつないで当然だろう――お嬢も、たいがい初心（ウブ）だな、とランディは息を吐いた。
キーアが、そっとエリィの手をにぎる。
「エリィも手つなぎたいの？　じゃあ、キーアがつないであげるね」
「ん……ありがとう」
エリィの表情がやわらぐ。
えへへとキーアが笑い返した。

鏡の城に着くと、鐘の音が聞こえてきた。
見上げる。
「この鏡の城の一番上には、鐘があって……ふたりで鳴らすと、願いが叶うそうですね」
「そうらしいね」
入園時にもらったパンフレットに、そう書いてある。
ロイドは城を見上げた。
「ティオは鐘を鳴らすとしたら、どんなお願いをするんだ？」
「……そうですね」
じっ、と見つめてくる。
なんだろう？　とロイドは言葉を待った。
見つめ合う。
ティオが、かすかに頬を染める。
「……ロイドさんと……もっと………」
「ん？　俺と……なに？」
「…………………いえ、なんでもないです」
「？」
「ロイドさんと……なかなか見つからないという、みーしぇを探したいです」

「ああ、みーしぇか」
みっしぃの妹のピンク色のマスコットだ。ワンダーランドのなかでも、とくに珍しいという噂だが、今日はいるのだろうか？
「探してみましょう……まずは、こちらから」
「わかった」
そんなわけで、唐突に、みーしぇを探して園内を駆け回ることになった。
捜査の基本は足だ！
マップに×印を記入しながらエリアを絞り込んでいく。
相手が動くといっても走って移動しているわけではないだろうから、こちらが素早く捜査ポイントを絞っていけば発見できる可能性は高い――はずだった。
広い。
ふたりで行動しているといっても、別行動というわけにはいかないから、必然的にひとりで捜査しているようなものだ。
ロイドは見晴らしのいい場所まで出て、息をつく。
「はぁ、はぁ……きつくなったら言うんだぞ、ティオ？」
「へいきです」
今日のティオは、いつになく元気だった。ロイドのほうが先にめげてしまいそう。

「はぁ、はぁ……ロイドのやつ……どういうプラン……してんだ!?」
急に走りだしたものだから、尾行に気づかれたのかと思ったが、そうではなかったらしい。
いったい何が目的なのかわからないが、走り回るロイドたちを追いかけて、ランディたちも走らされていた。
エリィも肩で息をしている。キーアが青ざめた顔をしていた。
「あぅ……もう……だめ……キーアもう走れないよ……」
「無理するな、キー坊」
「でもひとりでは残していけないわ」
「ああ、そうだな。お嬢も残って休んでろ。俺はひとりで尾行する」
「そんな……」
「気になるのはわかるけどよ、キー坊をひとりにはできないだろ？」
「もちろん、そうね。じゃあ、落ち着いたら連絡して」
「りょーかい」
ふたりを残して、ロイドたちのほうへと足を向ける。

背後からエリィが声をかけてくる。

「ランディ、気をつけて……」

「フッ……大丈夫さ。ティオすけのセンサーは優れちゃいるが、テーマパークの騒がしさのなかじゃ、役に立たないハズだ」

「それじゃあ、私たちは休憩所へ行くわね」

「ああ、俺の代わりにアイスを買ってやってくれ」

「わーい、アイスー!!」

急に元気になったキーアに苦笑しつつ、ランディは走りだした。

しばらくして――

まるで犯人捜査のような熱意で走り回っていたロイドたちだが、さすがに疲労が溜まったのか、しばらく話しこんだ後、休憩所へと向かいはじめた。

ロイドが「もうすこしワンダーランドを楽しもう」と持ちかけ、「遊びながら探しましょうか」とティオが応じたわけだが。離れて尾行していたランディが知るよしもなかった。

休憩所に向かうロイドたちを見て、慌ててエニグマを取り出す。

「……やばい……出ないぞ」

そういえば、尾行任務ということでエニグマは音がしないように設定してあった。

鉢合わせなんてことになったら、大変だ！

ランディはエニグマでの呼び出しを繰り返した。



その頃、エリィは休憩所の店外にあるパラソルテーブルでくつろいでいた。

走り回っているランディには悪いと思ったが、休憩するからには最大限に休むのも任務のうちだ。

キーアにアイスを買ってあげ、自分はクッキーとアイスレモンティーを頂いた。

みっしぃのプリントされたクッキー。こんな日でなければ、ティオのためにお土産にしたかもしれない。

「あ」

キーアが指さす。

「なに？」

「ロイドとティオだ」

「え!?」

慌てて視線を向ければ、たしかに疲れた足取りで歩いて来るロイドたちの姿があった。

エリィは席を立つ。

「隠れるわよ、キーアちゃん！」

「なになに、こんどは隠れんぼー？」

「そんなところ！」

デートを尾行していたなんて知られたら、嫌われてしまうかもしれない……すくなくとも、ティオは喜ばないだろう。

店の外を走って逃げるだけの時間はないと判断し、エリィは目の前の店に入った。

建物の柱の陰に身を寄せる。

ほどなくして、ロイドたちが店に入ってきた。

ティオがメニューを指でなぞる。

「おすすめは、みっしぃカレーだそうです。甘口ですが、濃厚だとか」

「いいね。飲み物はどうする？」

「そうですね……私は、みっしぃソーダーにします」

「じゃあ、俺は、みーしぇレモネードにしよう」

それぞれ、水色のソーダと、ピンク色のレモネードが出てきた。カレーも受け取って、外のパラソルテーブルに落ち着く。

エリィはふたりの様子を窺いつつ、バッグからエニグマを取り出した。着信が5件もある。

――しまった！　周りが騒がしかったから気づけなかったらしい。

すぐに連絡を返す。

「……ランディ？」

『よ～やく繋がったか！　お嬢、ロイドたちが――』

「あやうく見つかるところだったわ」

『ははは、まぁ、バレてないなら、セーフだな。目標の様子は？』

「様子……」

視線をロイドたちのほうへ移す。

ちょうど、レモネードを傾けたところだった。

「お、これ美味しいな」

「そうですか。実は、みーしぇレモネードと迷っていたのですが……」

「ちょっと飲んでみる？」

「!?　………………いいのですか？」

「え？　そりゃ、味見くらいなら」

「量の問題ではないと思いますが……わかりました。では、い、いた、いただき、ます」

機械仕掛けみたいな固い動きでティオがレモネードのグラスを持つ。すこし迷ってから、グラスの端に唇をつけた。さすがに、ロイドの使ったストローを咥えるのは恥ずかしかったらしい。

なんとも初々しかった。

ぽつり、とエリィは漏らす。

「いいなぁ……」

『お嬢？　それが〝目標の様子〟の報告かよ？』

エニグマで通信中なのを失念していた！

「ハッ！　いえ、その……レモネードが美味しそうだったのよ」

『まぁ、そういうことにしておくか。俺も喉が渇いたな。ちょいと休ませてもらうか。店での行動は、お嬢がフォローしてくれ』

「了解」

エニグマをバッグに戻して、ふと気づく。

キーアがいない⁉

慌てて店内に視線を巡らせる。

カウンターでジュースを受け取っているのを見つけた。

駆け寄る。

「キーアちゃん、なにしてるの⁉」

「ロイドと同じのが飲みたくなっちゃって」

「はぁ……もう勝手なことしちゃダメよ。びっくりしたじゃないの」

「はーい」

店員さんが安堵の笑みを浮かべる。

「ああ、よかった。お母さんですか？　みーしぇレモネード、30ミラになります」

「……ッ⁉　あの……まだ……18です」

「え？　みーしぇレモネードは、30ミラなんですが……？」

「私……この子の、姉、のようなもの……です。まだ18歳ですから」

「あっ、申し訳ありません！　大人びてらっしゃるもので！」

「いえ……」

ぺこぺこ謝る店員に、エリィは静かに30ミラを差し出すと、ゆらゆらとカウンターを離れた。

キーアが後をついてくる。

「ごめんね、エリィ。そんなに悪いことだと思わなくて……ジュース飲む？　ロイドが美味しいって言ってたよ？」

「……大丈夫よ、キーアちゃんはなにも悪くないわ」

大人びて見られることには慣れているが、子どもがいると思われたのは、ちょっとショックなエリィだった。

「ぐす……まだ18歳なのに……」

そこへ、ランディがやってくる。

「よお、調子はどうだ？」

「ちょっ⁉　ちょっと、見つかったらどうするつもり⁉」

「この店、裏側にも出入口があるんだよ。どうした？　浮かない顔して？」

さすが女の表情には鋭い。

でも相談するようなことではない、と思う。

「なんでもないわ」

「そうなのか？」

「ハァ～……こうして、テーマパークでキーアちゃんを連れてると、親子三人に見えたりするのかしらね？」

「なっ⁉　な、なに言ってんだ、お嬢⁉」

ランディが珍しく焦っていた。

「どうかしたの？」

「いや、お嬢もたいがい……やれやれ、なんでもねえよ」

キーアは、みーしぇレモネードを飲んで御満悦だった。

「おいしー‼」



ロイドたちはランチのあと、いくつかのアトラクションを見て回り――

陽が西に傾いてきた。

「もうすぐ日が暮れるな……」

「はい」

「夜には花火とかあがるらしいよ」

「え……あの……夜ですか」

「向こうに見える立派な建物は、ホテルかな？　そういえば、ミシュラムのホテルって、どこもすごく豪華だからな」

「ホテル……⁉」

ティオの顔が赤くなっていく。

ぱたぱたと手で首筋を扇いだりして。

そんな彼女の様子など、ロイドは気づくはずもなく。

「ねえ、ティオ」

「……っ⁉」

「明日も仕事だから、暗くなる前に帰ったほうがいいと思うんだけど……ん？　どうかした？　疲れてるのか？」

「い、いえ……そうですね。わたしとしたことが……わかりました。では、次で最後にしましょう」

「どれがいい？」

「まだまだ、いっぱいありますが……えっと、あれに」

ティオが選んだのは、観覧車だった。

八角形のゴンドラが巨大な円を描いて廻っている。

「いいね」

「はい」

ロイドはティオと、ゴンドラに乗った。ごうんごうんと昇っていく。

ワンダーランドどころか、ミシュラムぜんぶが見渡せた。

穏やかな午後の陽差しに包まれた楽園。

ほう、とティオが吐息をこぼす。

「……素敵です」

「思い出に、なったかな?」
「え?」
「一生の思い出になるくらい……楽しめたかな? 俺は、ティオとの約束を果たせたんだろうか……?」
「ふふ……もちろんです。ありがとうございました、ロイドさん」
「よかった」
　ロイドは椅子に背を預ける。
　体から力が抜けていくような安堵を感じた。

　観覧車から降り、ロイドたちは正門に向かって歩きはじめる。
　途中、ふと売店に寄った。
「ロイドさん、なにか欲しいものがあるんですか?」
「いや……高価なものは買えないけど……これなんか、どうかと思って」
　ロイドは《ラバーストラップみっしぃ》を手に取り、差し出した。
「そんな、悪いです。連れてきてもらったうえに」
　ぶんぶんとティオが手を左右に振る。
「いや、今日はチケットまで用意してもらっちゃったからね。ティオさえ気に入ったなら、贈らせてくれないか?」
「もちろん、かわいいと思いますけど……」
　ティオが目を輝かせる。
「じゃあ、これを……」
「ロイドさん……」
　そのとき、楽しいテーマパークに不釣り合いな甲高い悲鳴が聞こえてきた。
「なんだ!?」
「なにごとでしょうか!?」
　商品はいったん置いて、ロイドは悲鳴のしたほうへと走りだす。すぐ後をティオも追いかけてきた。



　逃げて来る客たちの間を縫って、ロイドたちは広場へと出た。
　そこには、ペンギンに似た青色の魔獣が!
「ペングーだ!」
　広場に青色のペングーが二匹いる。
　まさかテーマパークに魔獣が出るとは思わなかった。
「ロイドさん、あれを!」
　ティオが指さした先には、逃げ遅れている子どもの姿が。
　男の子がふたり、怖すぎて腰が抜けてしまっているらしい。

「あわ……わわ……わ……」
「うわーん!!」
　そのふたりをかばうようにして、みっしぃが立ちふさがっている。
　テーマパークのマスコットなのに!?
　ロイドは素手のままだが、ためらっている暇はなかった。市民の安全を守ってこその警察官――特務支援課だ!
　全力で駆け寄り、ペングーの前へと飛びだす。
「クロスベル警察です! ここは俺たちに任せてください!」
「みなさん、早く逃げてください」
　ともに駆けつけたティオが、市民を安全なところへと誘導する。
　子どもたちの手を引きながら、みっしぃが頭をさげた。
「みししっ、ありがと～」
　こんな状況にもかかわらず役柄を崩さないとは……ロイドは妙なところで感心してしまった。
　ティオは感動に震える。
「じーん……特務支援課に出向して以来、こんなにうれしかったことはありません」
「えぇっ、そこまで!?」
「負けられませんよ、ロイドさん」
「あぁ、もちろんだ!」
　ティオが魔法に意識を集中させる。足元に魔方陣が浮かびあがった。
「……エニグマ、駆動」
「速攻でケリをつける!」
　今にも飛びかかってこようとするペングーの機先を制して、ロイドは間合いを詰めると拳を叩きつけた。
ぎょわ! ぎょわ! とペングーが声をあげて、のけぞる。
「……ぐッ!!」
　ロイドの拳に痛みが走った。
　もう一体のペングーが嘴でつついてきた。
「キシャー!!」
　おじぎするような動作は愛嬌があるものの、ハンマーのように重たくて固い嘴を体ごとぶつけてくる攻撃だ。その威力は半端ではなかった。
「ぐあっ!?」
「ロイドさん!? この……ダイアモンドダスト!!」
　足元に冷気が広がる。
　ペングーの周囲に白い結晶が集まった。
　氷の槍が現れる。
　魔法で作られた無数の氷槍が、魔獣へと向かって飛ぶ。
　命中するたびに冷気を撒き散らして氷が砕け散り、美しい輝きを放った。

水系の強力な攻撃魔法だ。

ぎょわ～～～ッ!?　と青色のペングーたちが悲鳴をあげる。

がっくりと動かなくなった。

どうやら魔獣たちは戦意を喪失したようだ。

ティオが息をつく。

「ふぅ……敵集団、撃破しました」

「やったか……」

ところが、またも甲高い悲鳴が聞こえた。

広場にある建物の陰から、赤色のペングーが現れたからだ。

しかも、八匹も！

ロイドの背筋が凍りついた。

――あんなにも数が多いなんて!!　ふたりだけでは、防ぎきれない。

魔獣たちが、グアグアと叫びながら、逃げる客を追いかける。

「やめろー!!」

ロイドは駆けつけて、赤色ペングーの横面に一撃を食らわせた。相手の注意を引きつける。

しかし、多すぎる。

六匹ほどが散り散りになって客たちを追いかけ回す。

ティオの魔法も、これほど散り散りになられては、効果範囲に捉えきれない。

――このままでは、みんなを守れない！

「くっ……どうすれば!?」

そのとき、物陰から長身の男が走り出てきた。

聞き慣れた声が響く。

「こっちは俺に任せときな！　おおぉぉぉ……!!　クリムゾンゲイル!!」

巨大な斧槍が、ペングーたちを薙ぎ払った。

続いて、発砲音があがる。別の方向へと走っていたペングーがもんどりうって倒れた。

「ここは通さないわ！」

現れたのは、パールグレイの長髪をなびかせる美しい少女だった。

ロイドは驚いて声をうわずらせてしまう。

「ラ、ランディに、エリィも!?」

ティオも目をしばたいた。

「……おふたりとも……どうしてここに!?」

離れたところから、「ロイド、ティオ、がんばれー!!」と声がした。

「キーアまでいるのか!?」

「おしゃべりは後だ！　こいつが必要だろ、ロイド！」

ランディが放り投げたのは、使い慣れた装備（トンファー）だった。

「持ってきてくれたのか!?」

「こんなこともあるかもしれん、ってセルゲイ課長がな！」

「すまない、ランディ!!」

ティオが再び魔法の魔方陣を浮かびあがらせる。

「エニグマ、駆動……みなさん、お願いします！」

「まかせて！」

「おっしゃぁッ!!　とっとと終わらせるぜ！」

「よし、一気に行くぞ！」

ランディたちの加勢を得て、ロイドとティオは魔獣を撃退することに成功した。

魔獣が現れた原因は、柵の取りつけ不良だった。

弱っていたところがあって、壊されて入ってこられてしまったらしい。

ミシュラムの保安責任者が何度も頭を下げて感謝してくれた。

それよりも、ティオには、みっしぃのお礼ひと言のほうがうれしかったようだが……

「本当にありがとうございました！　今から、すべてのフェンスを入念に点検しなおし、がっちり補強します!!」

責任者の人が固く約束してくれた。

ロイドはうなずいて返す。

「そうしてください。楽しい場所だからこそ、安全第一ですからね」

ＭＷＬを出た頃には、すっかり西日が差していた。

「いや～、だいぶ遅くなっちまったな～」

ランディがぼやく。

キーアが大きなあくびをして、エリィが気遣う。

「自分で歩ける？」

「へーき……むにゃ……んにゅ」

いつも通りの平和な特務支援課の風景だ。

ティオがジト目なこと以外。

「……それで？　どうしてミシュラムにいたのですか？」

「ギクッ」

ランディが目を逸らす。

そういえば、とロイドは小首をひねった。

「たしかに妙だな。ランディもエリィも非番じゃないはずなのに」

「あ、いや……今日のは支援要請だったんだ。そうだよな、お嬢？」

「えっ!?　私に振られても……」

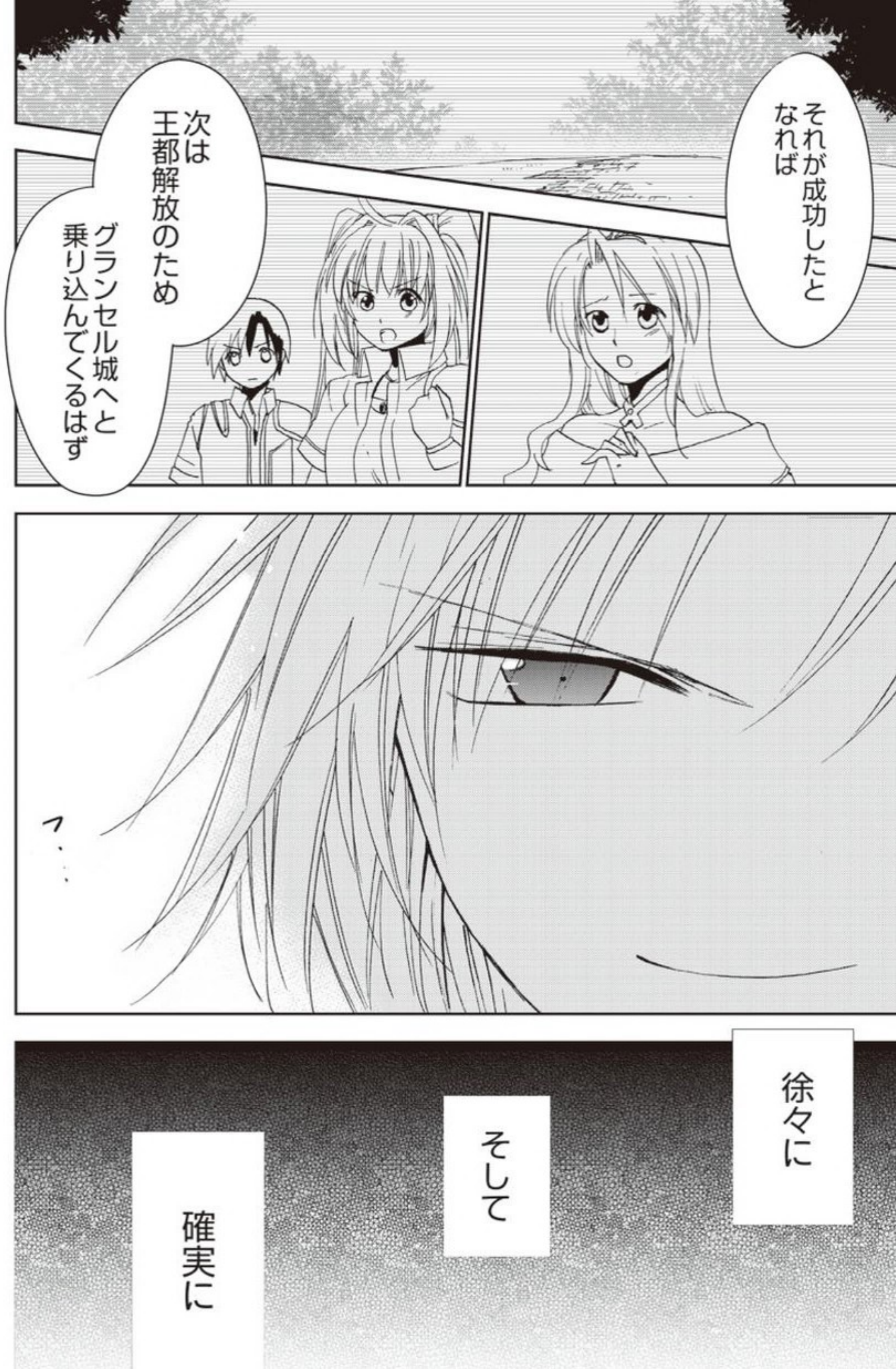
「エリィ〜、もう隠れんぼしなくていいの〜？」
「ちょっ、キーアちゃん!?」
ティオの表情が曇っていく。
「……つまり、わたしとロイドさんを、つけてきたのですか？」
「えっ？　そうなのか？」
ぶんぶん、とランディが首を横に振った。
「ち、違うって！　偶然！　お、俺は……そう！　お嬢とデートしてたんだよ！」
「ええっ!?　じょ、冗談じゃないわよ！　そんなこと絶対にしません！」
「お嬢、ここは話を合わせるとこだろ!?」
「そんなこと言われても……だ、だめよ、そんなの」
頬を染めてエリィがうつむく。
ティオが口をへの字にした。
「エニグマ、駆動……」
ぶおん、と魔方陣が広がっていく。
「えっ、ティオ!?」
慌ててロイドは止めに入るけれども、気づくのが遅れた。
耳まで真っ赤にしたティオが、ランディへと手を突き出して——魔法を発動する。
「お仕置きです！　アイスハンマー!!」
「うひゃ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜!?」

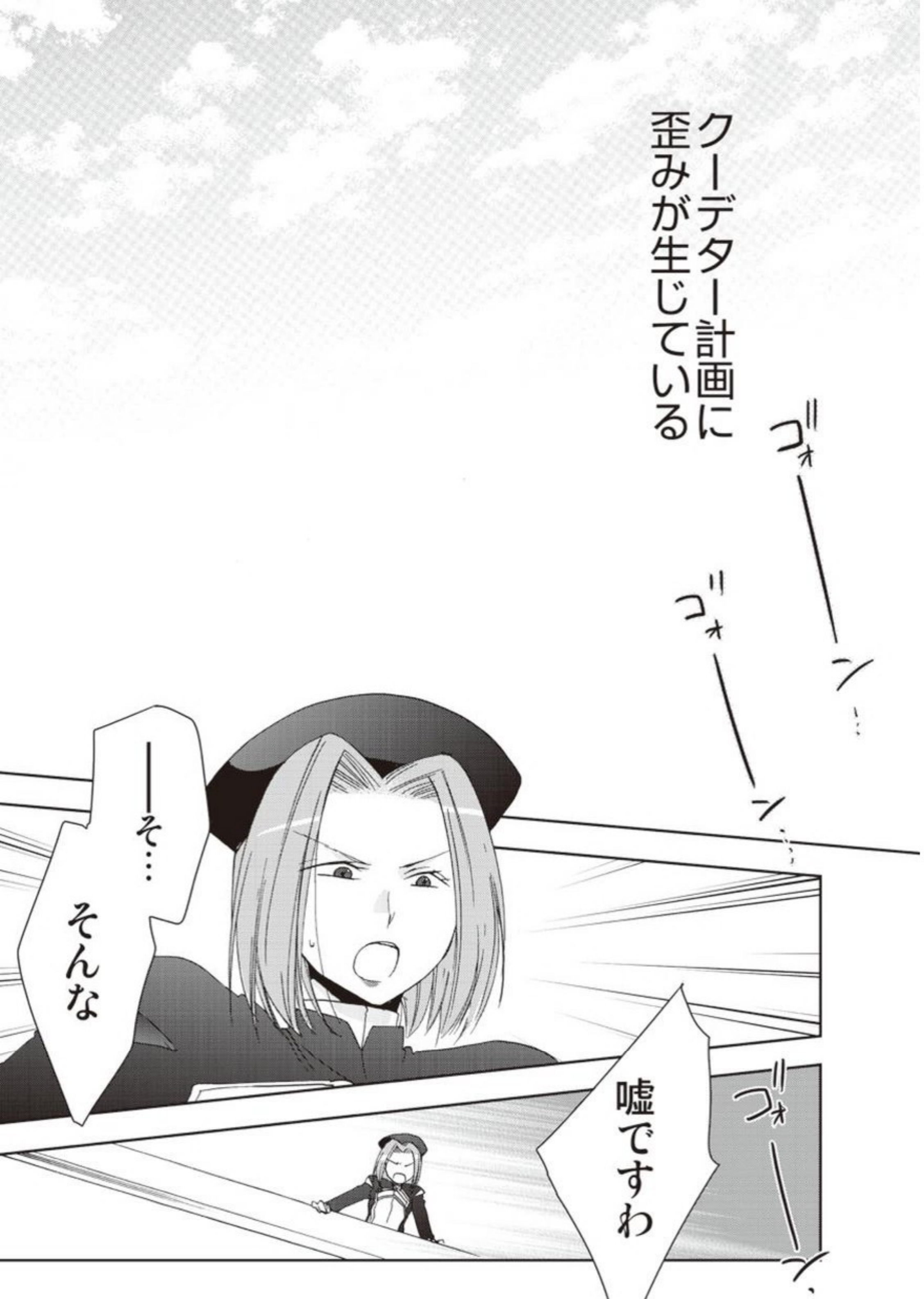
夕焼けに染まるミシュラムの桟橋に、騒がしい悲鳴が響きわたるのだった。

第1話『ティオとみっしぃの日』了

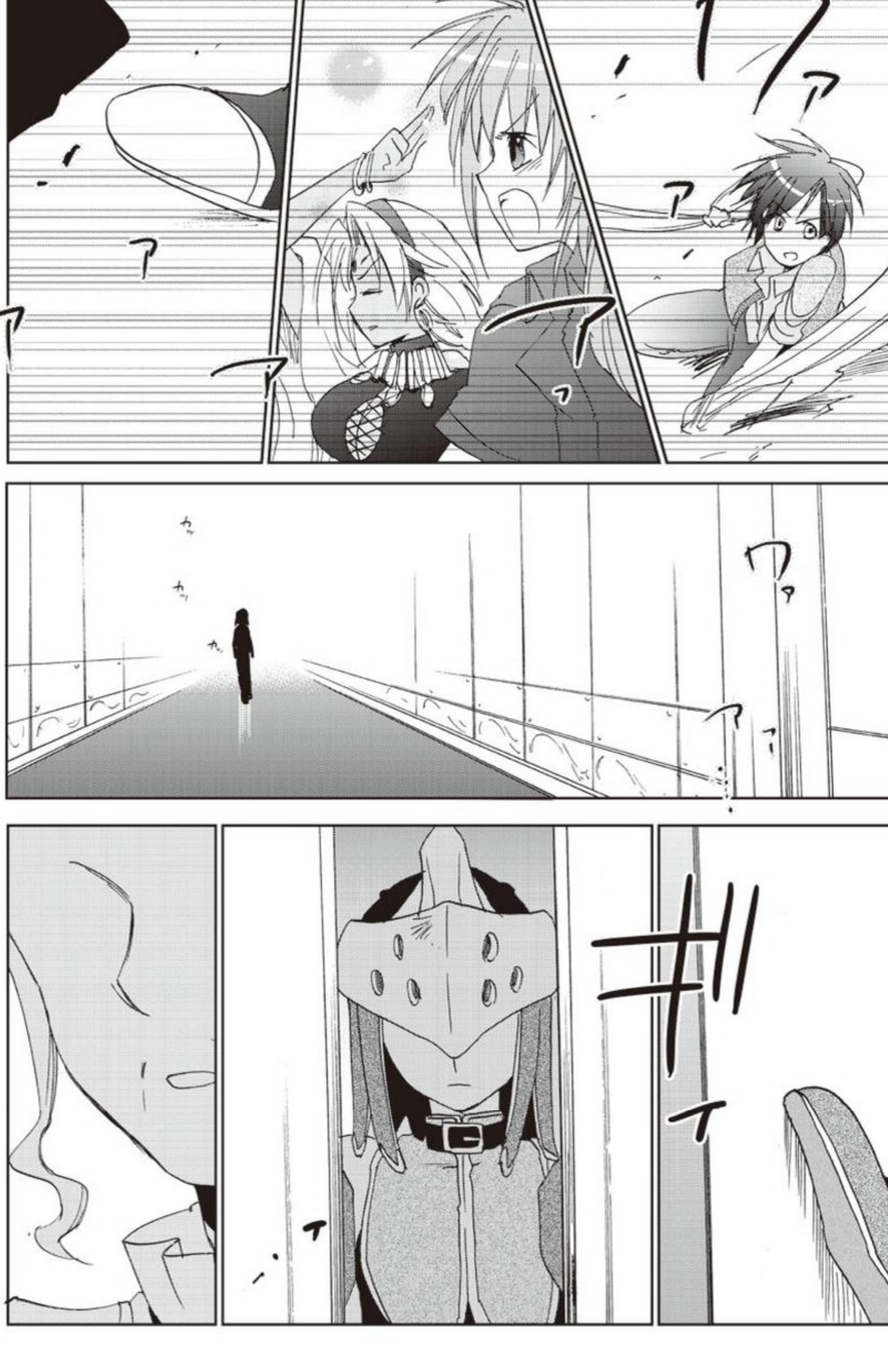





それが成功したとなれば
次は王都解放のためグランセル城へと乗り込んでくるはず
徐々に
そして
確実に


クーデター計画に歪みが生じている
ゴォーン
ゴォーン
ーーそ……そんな
嘘ですわ
ゴォー


ワァァ
どうして城門が勝手にッ…
一体なにが
たっ大尉どの！
特務飛行艇が！
エ…エステル・ブライト!!
それに…クローディア姫!!?
なぜあなた達がこんな所にっ…
いえ
何のために!!?
……
たッ…
大佐の邪魔はさせない!!
出撃ッッ!!!


ワァ


——城内が騒がしいようですね
貴方は？
情報部所属
ロランス・ベルガー


陛下の身柄を警護させていただく
——どうか
スッ
侍女や他の城の者たちの安全を
守って下さいますようお願いしますね
——承知した
……

ビュオオ
オ
……空気が……震えていますね……

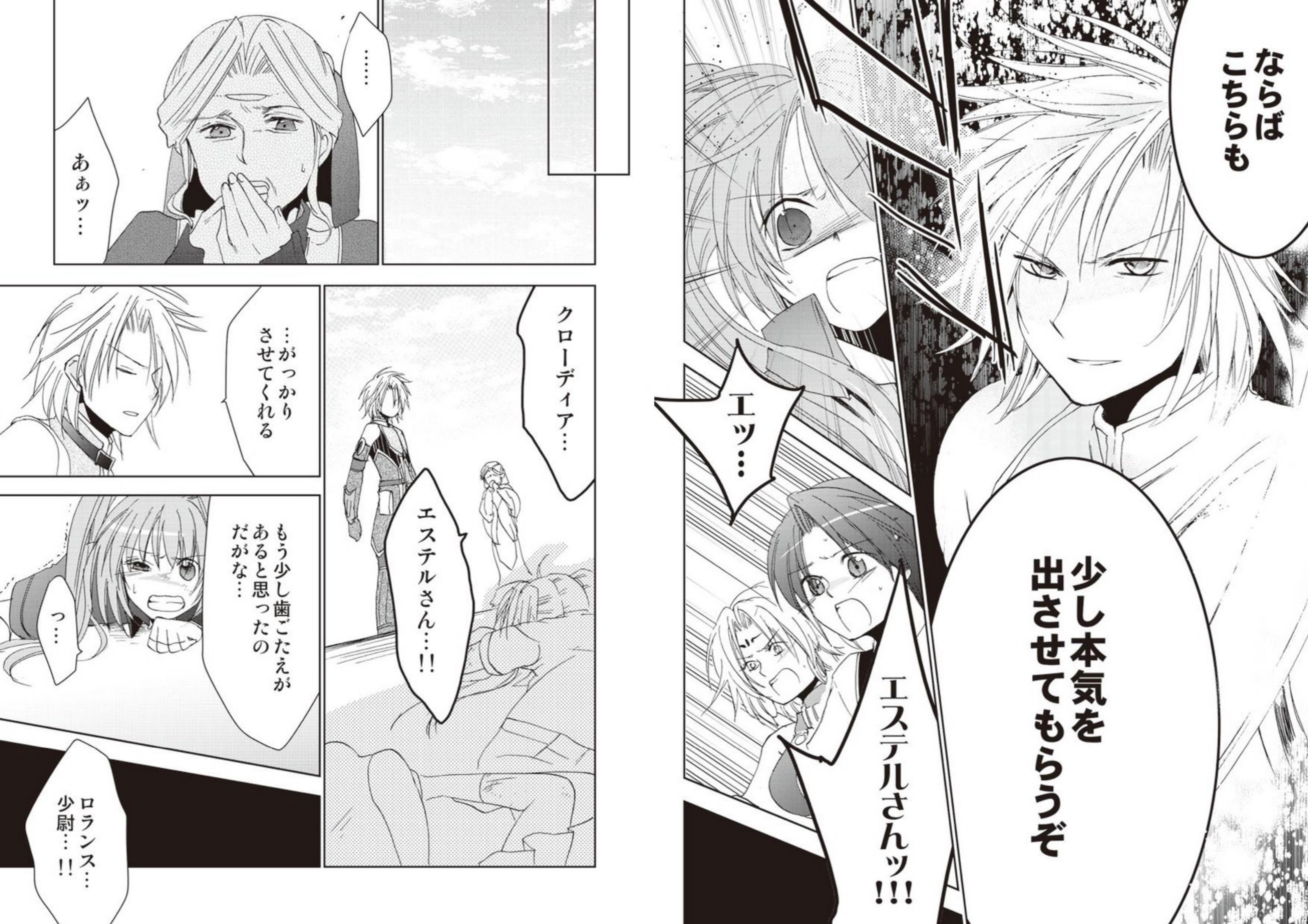

リシャール殿から聞いております
彼の理想 クーデターの目的
――《輝く環（オーリオール）》を動かすということ
…《輝く環（オーリオール）》については王家に伝わる伝承でも
具体的なことはなにひとつ語られていない
ですが これだけは言えましょう
《輝く環（オーリオール）》を動かすということは
…………なにかしらの不吉を蘇らせる
貴方たちは…この国に
何をしようと…？
大佐が話されたとおりのことだ
アリシア女王
ザッ
今まで「都合の悪いことから目を背けてきた」ことの甘さ
弱さ
愚かさ
スタ
スタ…
それらをこの国に気づかせてやるには「痛み」が必要だ

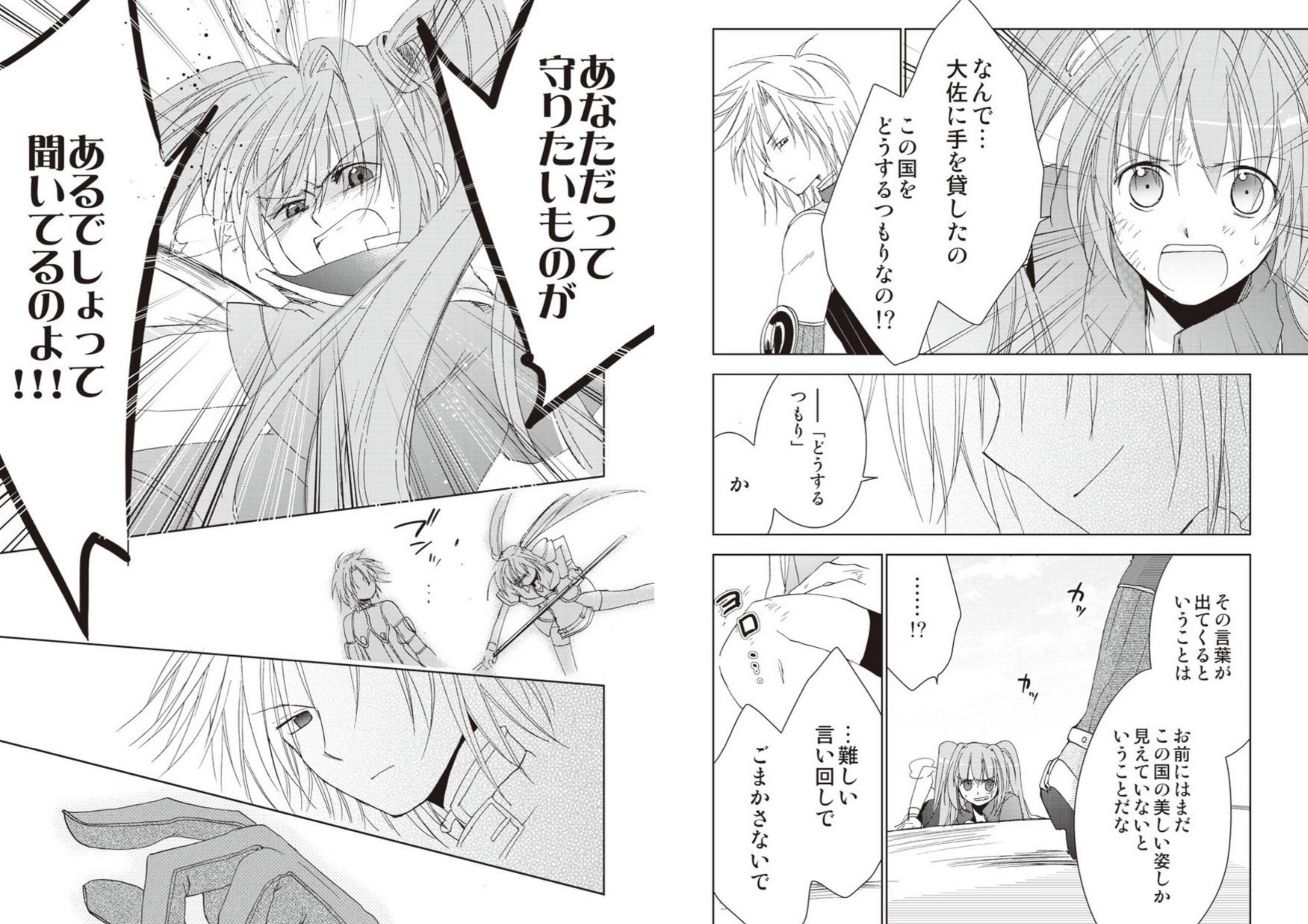


《輝く環(オーリオール)》の その不吉は
痛みとして この国に 降りかかるだろう
!……
貴方は…？
……
ガチャ
お祖母さま 大丈夫ですか!?
クローディア…
それに エステルさんも…
ようやく 来たか…
……
武術大会で 手合わせした あの少年は いないのか
フッ 女だけのチームとは なめられたものだ
…あの
お祖母さまを 返して下さい
もしあなたが 大佐に雇われた だけなのなら
もう戦う理由など ないはずです…！
……
この世を 動かすのは 目に見えている物 だけではない
クオーツ盤だけ見ていては 歯車の動きが判らぬように…
……？
心せよ クローディア姫


国家というのは巨大で複雑なオーブメントと同じだ
人々というクオーツから力を引き出すあまたの組織・制度という歯車…
それを包む国土というフレーム…
その有様を把握できなければ
貴女にも女王としての資格はない
面白い喩えをするものですね…
ですが その通りかもしれません
まさかこの場で国家論を聞くとは思わなかったけれど…
…!?
これは失礼した
陛下には無用の説法でしたな
なっ…
なに言ってんのかわかんないけど


要するに女王様を解放する気はないってわけね!?
…!?
だとしたら…どうする?
決まってるわ…力ずくでも返してもらう!
…いいだろう


ならばこちらも
エッ…
少し本気を出させてもらうぞ
エステルさんッ!!!
……
あぁッ…
クローディア…
エステルさん…!!
…がっかりさせてくれる
もう少し歯ごたえがあると思ったのだがな…
っ…
ロランス少尉…!!


なんで…大佐に手を貸したの
この国をどうするつもりなの!?
──「どうするつもり」か
カッ
カッ
その言葉が出てくるということは
お前にはまだこの国の美しい姿しか見えていないということだな
……!?
ヨロ…
…難しい言い回しでごまかさないで
あなただって守りたいものがあるでしょって聞いてるのよ!!!
ブン
…


ッ…
ドサッ
陛下…それ以上は動かないでいただこう
死ぬようなケガではない


…その瞳…
なんて深い色をしているのかしら
まだ若いのに…大層苦労をしてきたようですね
…女王よ
あなたに俺を哀れむ資格などない


――ハーメルの名を知っている
貴公には…
……!!
ッ…女王様っ
!
さてと そろそろ時間だ
お望みどおり女王陛下は返してやろう
へっ…!?
大佐を止めたければ地下へ急いだ方がよかろう
地下に…
まさかあの場所から地下に降りたということですか!?


ガッ
そこの遊撃士たちを導いてやるといい
それでは
さらばだ


ヒュゥ
ウ
――女王よ


あなたのような人間がいて
なぜハーメルのような悲劇が起きてしまったのだ
任務完了♪だね
お疲れ様レーヴェ
クーデターの続きは大佐に任せよう
ここから我々は次の段階へと移行する
――エステル・ブライト…



純粋なまでの実直さは
父親譲りか…
——さて
これにてヨシュアの偵察任務も完了だ
そこでだ
ヨシュアの記憶の封印を解きブライト家を撹乱させるというのはどうかね？
教授ってホントひどい事考えるよねぇ
わぁ…自分のオモチャを壊すつもり？
……
それはヨシュアを…捨て駒にするということか？
とんでもない
更に有意義に働いてもらおうと言っているのだよ
我々の大義のためにね
勝手にすればいい
悪趣味な奴め…
——本当は封印を解いたヨシュアの行動を観察してみたいだけなのだろう
お許しが出たよ
やったね！教授



2011年10月からから好評配信中のWEBラジオ『ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります』の舞台裏をこっそりお届け♪

ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります
■**配信日**　毎週金曜日、公式HP、ランティスラジオ、ニコニコ動画にて更新。
■**メインパーソナリティ**　水橋かおり（『碧の軌跡』ティオ・プラトー役）　小寺可南子（『ファルコムjdkバンド』ボーカル）
■**公式ホームページ**　http://www.falcom-radio.com/

第18回-第19回

柿原徹也（『碧の軌跡』ロイド・バニングス役）
子安武人（『空の軌跡』オリビエ・レンハイム役）

『零の軌跡／碧の軌跡』の主人公にして、いじられ役としてお馴染みのロイド役の柿原徹也さん。そして、『空の軌跡』の人気キャラで、ファンからもキャストからも「おもしろい人No.1」の栄冠に輝くオリビエ役の子安武人さんがゲストとなった18回、19回。『碧フィールド』では、ロイドに勝るとも劣らない来歴を持つ柿原さんが終始、女性陣にいじられる姿が見受けられた。そして、『空フィールド』では、もはやオリビエなのか子安さん本人なのか分からない謎の人物と化した子安さんが大暴走！

▶第18回-第19回の舞台裏◀

18回の『空フィールド』冒頭でも水橋さんが不安視し、期待通り（？）の活躍を見せてくれた子安さん。そのため、出演者のみなさんはもちろんのこと、編集スタッフも大忙し。現在聴くことができる“あの”ドタバタな内容よりもハイテンションなカットシーン……一度だけでいいから聴いてみたい！

第20回-第21回

有島モユ（『碧の軌跡』フラン・シーカー役）
神田朱未（『空の軌跡』エステル・ブライト役）

男性ゲスト陣が連続した16回から19回までを経て、久しぶりの華やかな女性ゲストが登場した、20回、21回。『空フィールド』の神田朱未さんは、昨年ニコニコ生放送にて行われた第０回以来のゲスト参加。配信日がちょうど発売日ということもあり、OVA第２巻が話題の中心となった。『碧フィールド』は癒し系ボイスの持ち主・有島モユさんに、以前ラジオ内でも話題となった、有島さんの「裸」に関する噂の真相を直撃！　大胆発言連発にドキドキしきりの収録ブースだった。

▶第20回-第21回の舞台裏◀

エステルにはヨシュア、そしてフランにはノエルという、切っても切れないキャラクターがいるが、そのキャラを演じる方はすでにラジオに出演済み。神田さん、有島さんともに、「今度はふたり一緒に出たい！」とスタッフに直談判するシーンがあった。今後のラジオの動向から目が離せない！





今月のコテガキ

毎週更新とともに発表される、小寺さん直筆の「コテガキ」を少しだけご紹介！




いじめ、かっこ悪い。
みんな集まれ！
ファルコム学園
一限目！
新久保だいすけ
依頼人
依頼!? やるやるっ やります!!
そうか！ では依頼人を 呼んでこよう
校長
いやー助かったわ 最近 金欠で 困ってたんだー♪
誰かが見境なく スニーカー 買いまくるのが 原因なんだけどね
ガチャ
失礼する …君達が 「ゆーげきし」 という者か？
子供か…
チッ
お金持ってなさそう だからってロコツに 態度変えるの やめようね


しきたり
僕の名はセリオス ファーレーンという 国の王子だ
あら ホホホ 王子様でしたのね！
金持ちと 認識したとたん この態度!!
実はその国を摂政の アクダムという男に 乗っ取られてね
うむ。
追手から逃れる途中 気付くとこのザナドゥに 迷いこんでいたそうだ
それはお気の毒… じゃあ私達にその国を 取り戻せと？
いや 異世界の者に そこまでは望まん 僕の修業の手伝いを してほしいのだ
ただし！ 僕の世界のしきたりで 仲間になるためには それなりのレベルで なければならん
れ レベル!?
そう…ちなみに 僕のレベルは 5だッ
それ以下なら 出直すがいいッ
Lv.87
Lv.91
したアァァ ーーッ
僕ごときカスが 生意気言って サーセン したァ!!
ガーン ガーン

ヨシュアのアレ



生態ピラミッドインザナドゥ



魔物と王子



死闘の果て





みんな集まれ！ファルコム学園 2限目！

新久保だいすけ

スライムいじめ



師匠



EXP



プライド



弱者たちの黄昏



なりたくない



王子と冒険家



小説版 零の軌跡 ショートストーリーズ

田沢 大典
Illustration 松竜

ティオの章（後編）

ヨナがラインフォルト社の研究室で何かをやらかした。

そう聞いて現場に駆けつけたティオを待っていたのは、むくれるヨナと、オタオタとしているロバーツ、そしてひどく不機嫌そうな表情のマルセルだった。

「ヨナ……！」

ティオは軽く肩で息をしつつ、ヨナに詰め寄る。

「いったい何を……」

「ハッキングですよ、プラトーさん」

ヨナが口を開く前に、マルセルが言った。ティオは驚いてマルセルの方を見る。

「ハッキング……？」

「我々がここで、新型魔導杖の研究開発をしているのはご存じでしょう？ その魔導杖のあるシステムの起動実験を行おうとしていたんです。準備が整って、軽い休憩の後にさぁ実験を、と思ったところで、研究室の方が騒がしい。何事かと来てみれば……」

マルセルはヨナをチラリと横目で見た。

「このヨナ君が、端末をいじってましてね。何事かと思ったら、システムにハッキングをしかけていた。そして、新型魔導杖は、ご覧の通りです」

マルセルが顎で指し示す。そちらを見ると、杖らしき形をした、黒焦げの物体があった。ティオの持つ魔導杖と形がやや似ているようだが、なにせ黒焦げになっているので細かいことは分からない。どうやら、あれがラインフォルト社が開発しているという新型魔導杖のようだった。

ロバーツが、がっくりと肩を落としてティオに話しかけて

きた。

「僕も騒ぎを聞きつけて飛んできたんだよ。そうしたらもう、こんな状況になっちゃって……」

「ボクじゃないっつーの！」

ロバーツの声を遮るようにして、ヨナが叫んだ。

「システムには最初からウイルスが仕込まれてたんだよ！ ……っつーか、あれはどう考えてもウイルスなんかじゃねーよ。あらかじめ暴走するよう装置自体に何らかの仕掛けが組み込まれてたんだ！ それで、ヤベって思ってたらこいつらが来てさ……」

捕まった、ということなのだろう。ティオはひとつため息をつき、ヨナに尋ねた。

「……ヨナ。あなたはどうしてここに？ 仕事があったハズでは？」

それは、と言って口ごもる。マルセルが不機嫌な表情を崩さずに言った。

「彼の所属部署に確認しましたが、トイレに行く、と言って抜け出していたそうです。そして、我々の研究室に無断で侵入したと」

「カギが開いてたんだよ！」

「……カギが開いていたからといって、勝手に入っていいというわけではありません」

脱力した様子で、ティオが言う。それを聞いて、ヨナはそっぽを向いてしまった。

状況はだいたい把握した。しかし、ティオにはいくつかひっかかることがあった。

まず、ヨナがいくらイタズラ好きとは言え、今回のように突発的な犯行に及ぶことはあまりない。どちらかというと用意周到に準備をし、細工に凝ってイタズラをしかけるタイプだ。それゆえに大がかりになり、結果として被害も大きくなってしまうのだが。

それに、ラインフォルト社の研究室が、どうやらかなり無防備な状況にあったことも気になっていた。帝国の軍需産業の一翼を担うラインフォルト社は会社規模も大きく、機密事項に関する情報が扱われることも多いため、管理は徹底しているはずだ。所属する研究員・開発者も有能ぞろいである。マルセルも、言動がいちいち引っかかるが、彼が優秀な人材であろうことは、ティオにも分かっていた。その有能な集団が、これから起動実験をするデバイスを放置して、しかもカギもかけずに、さらに言うならばひとりの監視者もつけずにその場を離れる……あまりにも不自然すぎた。これがもし偶然というのなら、万にひとつもない偶然だ。

そんなことをティオが考えていると、マルセルが口火を切った。

「考えたくはありませんが、彼がどこかから資金提供を受けた企業スパイ、という可能性もある」
「……！」
ティオが驚いて目を見開く。しかしマルセルは、さもありなん、という表情で続けた。
「聞けば、彼はかつて導力ネットワークの破壊行為によって財団に多大な損害を与え、クロスベルへ逃亡したというではありませんか。その件といい今回の件といい、まるで何者かの意志によって妨害を仕掛けているように見えますがね」
「バッ……そんなんじゃねーよ！　ボクは情報で金は取るけど、ぶっ壊すためには……」
「君は黙っていたまえ！」
ヨナの反論を、ピシャリと叩きつけるような言葉で遮る。
まるで役者がセリフを読み上げるように、よどみなく言葉を紡ぐマルセル。
「今回の件、ラインフォルト社としては正式に研究所に抗議せざるを得ません。しかも、かなり厳しい態度で」
いや、実際に用意したセリフなのだろう――とティオは直感した。
そもそも、すべて都合が良すぎるのだ。昼休みでもないのに鍵もかけられていない無人の研究室、『たまたま』設定され準備段階にあったデバイス起動試験。そこにフラフラと入り込んだ、ヒマをもてあました過去に傷のあるハッカー。
すべてが仕組まれていたとしたら。彼らはなんの目的でこの茶番をお膳立てしたのか？
「あ、あのぅ……」
ロバーツが、額に浮かべた汗をかきつつマルセルに問いかける。マルセルは、まるで虫を見るかのような目でロバーツを見やり、吐き捨てるように言った。
「これは責任問題ですよ、ロバーツ主任」
苦虫をかみつぶしたような表情をしていたが、その目は違った。これは、弱い者いじめをして楽しんでいる目だ。かつていやというほど対峙したその目を見て、ティオは嫌悪感を新たにした。
「これほどの重大な過失事件となれば、あなたもただでは済まない。覚悟をしていただきたい」
その言葉に、ロバーツが哀れなほど汗をかき、身体を小さくする。
「そ、そこをなんとか！　ヨナ君も、悪気があってやったわけではないと思いますし……」
そんな言い訳をしたところで、まったく意味はない、とティオは言いかけてやめた。ロバーツもそんなことは百も承知だろう。だが、それでもなお擁護せざるを得ないのだ。
「……そもそも部屋を無防備な状態で放置していたのは、そ

ちらでは？」
ティオが反論を試みる。だが、それすらもマルセルの中では織り込み済みだったようだ。
「なるほど、確かにこちらにもプラトーさんのおっしゃるような非はあります。……ですが」
マルセルは、わざとらしくヨナをにらみつける。
「鍵をかけ忘れたから、泥棒に入られて好き放題されても仕方がない。泥棒は無罪放免……そんな法は、どこの国も採用はしていません。違いますか？」
「だからボクはドロボーなんかじゃ……！」
「ヨナは黙っていてください。話がややこしくなります」
「なんだと……！」
色めきだつヨナを、ロバーツがなだめようとする。
「ま、まぁまぁヨナ君、ここはひとつ穏便に……」
「こっちはケンカふっかけられてんだぞ!?　大人しくなんかできっこねーよ！」
案の定、ヨナの怒りの矛先はロバーツに向けられた。どうしてこうこの人は、やっかいごとを拡大するのだろう、とティオは内心でため息をついた。
「ケンカ、とは聞き捨てなりませんね。我々は被害者なんですよ」
ヨナのうかつなひと言は、さらなる延焼を招いたようだ。
「ふざけんじゃねーよ！　人を勝手に犯人扱いしやがって！　だいたいボクはやってねーってずっと言ってるじゃんか！」
「君の言い分などは聞いていない！　元脱走者で後ろ暗いところがあるハッカーの証言など、取り上げるに値するとでも言うのかね？」
相手を射殺さんばかりににらみつけるヨナ。その視線を冷徹な表情で受け流すマルセル。事態は膠着している。どちらかが折れない限り、この話は決着がつかない。そして、ラインフォルト社側が折れる可能性は万にひとつもなかった。
この危機的な状況をどうにか覆せないか？　ティオはずっと考え続けていた。だが、よいアイデアは出なかった。あらゆる状況が、ティオたちに不利に働いていた。
「……何も我々は、あなたがたといたずらに対立したいわけではない」
それまで厳しい表情をしていたマルセルの顔が緩んだ。
「我々も鬼ではない。もとより、ヨナ君とロバーツ主任に責任を取っていただいたところで、失われてしまった実験結果が戻ってくるわけではありませんし」
チクリと皮肉もこめつつ、あくまで優しい声色で話す。だが、ティオは知っている。これは相手にトドメを刺す前に、舌なめずりをしているのだと。
「我々は、魔導杖に関する実験をしていました。残念ながら

それは無に帰してしまったわけですが……」

やはり来た。マルセルは取引をするつもりなのだ。今回の過失の責任を取るという形で、ティオやロバーツに無理難題を要求するつもりだろう。

いったいどんな要求なのか？　もし万が一、ティオやロバーツにラインフォルト社への移籍を迫るようなことがあれば……そう想像して、ティオは背筋が寒くなるのを感じた。

「我々としても、代替の技術があるなら、それに越したことはない」

ティオが考え事をしている間にも、ロバーツは話を進めていた。だが、それはティオの想像とは少し違っていた。

「あなたがたの持っている魔導杖に関する技術の開示をしていただければ、特別に許しましょう。なんと言いましたっけ……<<エイオンシステム>>、でしたか。特にあのシステムは興味深い」

思わずティオは絶句した。まさか<<エイオンシステム>>を要求するとは、想像だにしていなかったからだ。どうしたものか、と考える間もなく、横でロバーツが大きく息を飲んだ。おずおずとマルセルに声をかける。

「あ、あのう、さすがにそれはちょっと……」

「渡せないというのですか？」

マルセルの声色が再び厳しいものに変わる。いや、さっきよりも鋭さを増していた。

「これだけの事態を起こしておきながら、まだご理解いただけない、と？」

険しい表情のマルセルは、その顔をロバーツに近づける。気圧されたようにロバーツが後ろに下がるが、マルセルは構わずさらに一歩前に詰め寄り、唾を飛ばさんばかりの勢いで怒鳴りつけた。

「いいですかロバーツ主任！　事と次第によっては、一企業だけの問題ではない！　外交問題にすら発展しかねないのですよこれは！　我がラインフォルト社は、帝国軍に多くの物品を納入している！　その情報をスパイしたとなれば、その少年は国際法に則り我が国に連行した上で射殺だ!!」

穏やかではない言葉が出てきて、さすがのヨナも顔を青ざめさせた。ティオも、脅しだろうとたかをくくっていたが、彼の剣幕を見て本当にヨナを帝国に連れて行きかねないと思いはじめていた。

一番たまらないのは、怒鳴られているロバーツだ。耳元で騒がれているので言葉の意味がどれだけちゃんと受け取れたかはわからないが、刺激的な単語の羅列と、なにより高圧的、というよりも恫喝まがいのマルセルの行動に、顔色は青色を通り越して真っ白になっていた。

そんなロバーツに、トドメとばかりにマルセルが怒鳴る。

「<<エイオンシステム>>を渡せばすべて許してやるというこちらの温情が分からないのか!?　渡して楽になるか、渡さずにお前達全員首になった上で帝国に連行されるのと、どっちがいいんだ!?」

「わ、渡します、渡しますっ！　<<エイオンシステム>>の情報をお渡ししますっ！　だ、だからっ、銃殺だけは勘弁をっ！」

マルセルのあまりの剣幕に、ロバーツはつい反射的に答えてしまっていた。

「主任……！」

ロバーツの言葉に、ティオが慌てる。<<エイオンシステム>>の情報を渡す――それが意味することを、主任は分かっているのだろうか？

「だ、だってティオ君、銃殺だよ!?　僕たち死んじゃうんだよ!?」

「それは、マルセルさんが言っているだけです。ちゃんと司法の場で争えば……」

そこまで言いかけて、マルセルが勝ち誇ったような笑みをしていることに気づいた。

「ちなみに、我が社が抱えている弁護士チームは大変優秀でね。国内法だけでなく、国際法にも明るい。万にひとつも勝ち目はないと思うが？」

その言葉に、ティオは押し黙るしかなかった。優秀かどうかはともかくとして、ラインフォルト社ほどの大企業なら、確実にお抱え弁護士はいるはずだ。兵器産業などという仄暗い世界と隣り合わせの会社なら尚更のこと。そしてその優秀さも折紙付きだろう。しかもこの場合の優秀さとは、弁護士として優秀なだけではない。何故か商人が謎の失踪を遂げてしまうような事態をも作り出せることを指しているのだ。

死にたくなければ、ティオたちはマルセルの要求を受け入れるしかない。他に選択肢はないのだ。

「話はついたようですね」

マルセルが勝ち誇ったような笑みを浮かべてふたりに話しかける。

「……自分の研究がフイになったというのに、とてもうれしそうですね。」

「ええ、もちろんうれしいですよ。我々としても、あなたたち魔導杖の先駆者と事を構えたくはなかった。笑顔になるのは当然です」

皮肉も、綺麗に受け流されてしまった。

ロバーツが、おずおずと話しかける。

「あの、情報を開示すれば、本当にヨナ君は不問に……」

「もちろんです。この研究室の室長として、確かにお約束しましょう」

「あ……ありがとうございます！　では、<<エイオンシステム>>の情報を開示するということで」
「はい、よろしくお願いします」
ロバーツは安堵した表情で、マルセルはこれ以上ないほどの満面の笑みで。お互いに手を差しだし、握手を交わす。
「そうだ。プラトーさん、あなたに証言者になって欲しい。確かにロバーツ主任は、情報の開示を許諾してくださったと」
マルセルの無駄に明るい声に、ティオは心底イラッとした。

それから数日後。
ティオとヨナは、ロバーツの主任室に来ていた。ここはロバーツが研究所内で仕事を行う場所だが、研究室にほぼ入り浸りなので、あまり使われることはない。従って、ティオとロバーツのお茶飲み場となっていた。そこに今日はヨナも混じって、三人でお茶をしている。
「……で、結局開示はしたものの……」
お茶をひと口飲み、ティオはつぶやいた。温かいお茶は気持ちをほっこりとさせる。だが、今のティオはお茶の味よりも大事なことがあった。
<<エイオンシステム>>の情報開示の件である。
お茶代わりに炭酸飲料を飲んでいたヨナが、やや気の抜けた答えを返した。
「……まさか、あんなことになるとはなぁ～」
確かに、ロバーツは<<エイオンシステム>>に関する情報を開示した。しかし、嬉々として『それ』を受け取ろうとしたマルセルたちは、困惑の表情を浮かべた。
そもそも、エイオンシステムとは、魔導杖と術者を繋ぐためのインターフェースの総称である。魔導杖に流れ込んでくる情報を術者に伝えるためのシステムなのだ。といっても、この『術者に伝える』がくせ者である。高価なクオーツや複雑怪奇なオーブメントシステムを組み込んだ魔導杖が処理できる情報は膨大だが、その情報を受け取るべき術者＝人間には膨大すぎて捌ききれない。だが、特殊な術者であるティオには可能である。ズバ抜けた感応力を持つティオなら。つまり、エイオンシステムとは、ティオという存在があってはじめて意味をなす――逆に言えば、それ単体では何の意味もなさないものだったのだ機能のひとつだったのだ。
それをマルセルたちは、ティオたちが開発に携わっている魔導杖が持つ機能すべてを総称して<<エイオンシステム>>だと思いこんでいた。<<エイオンシステム>>という名の巨大なアーキテクチャがあると勘違いしていたのだ。
当然、彼らはエイオンシステム以外の情報開示も迫り、同時にロバーツやティオに対し、技術協力をするよう申し出た。しかし、これに対してロバーツはとんでもない返答をしてしまったのだ。
『あの……開示するのは<<エイオンシステム>>だけでしたよね？』
「……主任も、とんだタヌキですね」
ティオが、いつものジト目でロバーツを見る。言われたロバーツは、美味そうに飲んでいたお茶を口から離し、ティオにいつもの困り顔を向けた。
「タ、タヌキ？　僕がかい!?」
「いいんです。今回のタヌキっぷりで、少し主任のことを見直しました」
エイオンシステムのことを言い出したのは向こうの方である。ティオは最初から、彼らの水準に扱える代物ではないと分かっていた。ロバーツも同じだろう。
だが、彼はそれが奪われてしまえばすべてを渡してしまうのとイコールだ、と見せかけた。一芝居打ったのだ。
当然、マルセルはこれに対し烈火のごとく怒り、反論した。我々の被った損害を考えれば、すべての情報を開示して当然である、とか、これでは詐欺ではないか、とか。
それに対してティオは、言い放った。
『わたし、ティオ・プラトーは証言者として、ロバーツ主任が<<エイオンシステム>>の情報開示をすること、それ一点のみしか明言していないことをここに証言します』
そのひと言を聞いて、マルセルは絶句した。ティオを証言者として任命したのは、他ならぬマルセルである。その彼女の証言を否定することは、道義上できない。
「アンタも大概じゃねーか」
炭酸飲料を瓶からラッパ飲みしながら、ヨナが呆れた様子で言う。いささかムッとした表情で、ティオが反論した。
「……隙を見せたのは相手の方です。わたしを証言者に、などという無駄なひと言を言わなければ、こんなことにはなりませんでした」
つまり今回の一件は、勝利を確信し、油断していた相手が見せた隙に綺麗につけ込み、みずからの落ち度と敗北を演じたロバーツの逆転勝ちというわけだ。しかも皮肉なことに、マルセルはロバーツの言葉の裏づけを、ロバーツ側の人間であるティオに保証させてしまった。策士、策に溺れるとはこのことである。
とはいえ、かなり薄氷を踏むような状況であったことは確かだ。あの状況下で、見事な演技で華麗なる逆転の一手を打ったロバーツは、やはり並みの頭脳ではない、とティオは彼へ

の認識を新たにしていた。

それに、と言って少しうきうきとした口調でティオが続ける。

「本当にトドメを刺したのは、主任の言葉ですしね」

ティオをして『トドメ』と言ったのは、以下のようなものだった。

「アーキテクチャの開示、ですか？　あのー、どうしてそれが必要なのですか？」

マルセルから情報の開示を求められ、まず最初にロバーツが言ったのがこの言葉だった。マルセルはあきれたように反論する。

「どうして、ですと⁉　そもそもそれがなければ……」

魔導杖は作れない――、と言いかけて止めた。その言葉を言うのは、彼のプライドが許さなかったのだ。そもそも彼は、頭脳の優秀さで出世したわけではなく、研究所という特殊な環境での権力闘争に特化して生き残ってきたに過ぎない。生粋の学者であり導力技術者であるロバーツとは、そもそも比べものにならないのだ。

そんな彼のちっぽけなプライドを、ロバーツはたったひと言で打ち砕いてしまった。

「だって魔導杖のひとつやふたつ、導力器の研究にたずさわっているものなら自分で作ってしまえばいいのでは……」

マルセルは思わず息を呑み、顔を真っ赤にして肩を震わせた。完全に侮辱された、と感じとったのだ。

「……ですが、我々の研究している、その、基本アーキテクチャと比較することで、より高度なシステムの構築をですね……」

恥辱に震えながら、マルセルはなんとか体裁を取り繕うために言葉を紡ぐ。しかし、その言葉をまたもロバーツは打ち砕いた。

「待って、待ってください。別のアーキテクチャと比較しても、意味なんかないじゃありませんか。思想が違うものを開発途中で取り入れることほど危険なことはありません。まず組み上げることはできなくなります。万が一組み上がったとしても、メンテナンスの煩雑さや機能拡張における制約など、デメリットが大きすぎます。マルセルさんほど優秀な人なら、そんなことすぐに分かると思いますけど」

まるで、デキの悪い生徒が、うかつなひと言で教授に延々とダメ出しをされているような状態だった。実際、マルセルは学生時代に幾度となくこのような目にあってきていた。

うつむいてしまったマルセルのことが目に入っていないのか、ロバーツは明るい調子で続けた。

「あのぉ、ちょっと疑問なんですが、マルセルさんほどの人



が、どうして既存のアーキテクチャにこだわったりするんですか?」
「失礼する‼」
マルセルは限界だったのか、もの凄い勢いでドアを締め、ロバーツの研究室から出て行ってしまった。残されたのは、事情がまったく飲み込めない様子のロバーツただひとりだった。
「……ということがあったそうです」
「うわ、キッツー! 『人に頼るなんてお前ってサイテーの無能野郎だな』って言ってるようなもんじゃん!」
「……主任、鬼ですね」
ヨナがケタケタと笑い、ティオが微かに微笑む。華麗なる逆転劇を見せた上で、相手にトドメを刺して抗戦の意欲を奪う。≪エイオンシステム≫によって、エプスタイン財団の魔導杖開発チームが、ラインフォルト社のそれとは比べものにならないほどすごいことを見せつけておいて、先のひと言である。これ以上ない、というパーフェクトな勝利だった。ロバーツも、さぞや溜飲を下げたことだろう、とティオは思った。
だが、そんなふたりの様子を見て、ロバーツは慌てた様子で言った。
「いやいやいやいや! 本当にそんなつもりじゃなかったんだよ!」
え、という表情で、ティオとヨナはロバーツを見る。
「エイオンシステムだけ情報開示してくれなんて言われて、ちょっとおかしいなーとは思ったんだ。だってほら、多分ラインフォルト社チームで開発している魔導杖はアーキテクチャが異なっているだろうし、それに無理矢理エイオンシステムなんて載せられないことくらい、研究者なら誰でも分かることだろう?」
誰にとがめられているわけでもないのに、言い訳のように一気にまくし立てる。ヨナがややあきれた様子で、ロバーツに尋ねた。
「あのさ、アーキテクチャが異なるとか以前のレベルで、あいつらとボクたちじゃ格が違いすぎじゃん。エイオンシステムなんてぜってー使いこなせないって分かってたし」
今度はロバーツが驚く番だった。
「そ、そうなの? ホントに⁉ うーん、そうなのかなぁ……」
そう言いながら、ロバーツは腕組みをして考えこんだ。
「いやぁ、僕なんて研究者としてはまだまだだよ。だから勉強のために、マルセルさんが開発している魔導杖をぜひ見せて欲しいって前からずーっと言ってたぐらいだよ?」

つまりロバーツは、策謀を巡らしたのではなく、純粋に導力学者として発言していただけなのだ。しかも、自分の真の実力を知ることなく。
「……なんつーか」
「はい……本当にごくわずかですが、マルセルさんが哀れに思えてきました」
呆れてつぶやいて、ヨナとティオはそれぞれ飲み物を口にした。ひとりロバーツだけが、まったく分からない、といった感じで、ふたりを交互に見ていた。
温かいお茶でほっこりとしながら、ティオは心のメモ帳に書いていた。
天然は最強で、タチが悪いです、と。
「ところでその≪エイオンシステム≫の技術資料ですが……結局どうなったのですか?」
「それがさぁ〜、聞いておくれよティオ君!」
ロバーツはさんざんな目にあったようで、ティオにすがりつかんばかりの勢いだ。その様子を見て、ティオはいつものジト目になった。
「……ウザイので聞きたくありません」
「あぁっ! ごめん、ごめんよティオ君、ちゃんとマジメに話すから! だから……機嫌なおして、ね?」
いつものティオとロバーツのやりとりを見て、ヨナがやれやれ、といった様子で肩をすくめた。
「あの後、さすがに事が事だけにちゃんと上層部に報告したんだ。そうしたら、エライ人達の間で揉めちゃったらしくて」
≪エイオンシステム≫の情報をなかば恫喝で引き出したことについて、エプスタイン財団はラインフォルト社に正式に抗議。ラインフォルト社の社内調査チームが直々に乗りこんで来て、情報収集を行った結果、ウイルス騒ぎも研究室をわざと開けていたことも、すべてマルセルが独断専行で行ったことで、まったく進まない魔導杖開発に焦って一芝居打った、という結論が出た。
結局、マルセルはこの一件の責任を取り即日解雇させられ、帝国へと帰された。
「マルセルさんは確かに怖い人だったけど、悪い人じゃないと思ってたから、ショックだよ……」
マルセルに脅されたというのにあまりにお人好しなロバーツの発言に、ティオはがっくりと肩を落とした。
「……主任、あの人のせいでクビにされかかったこと、忘れたんですか?」
「いや、まあそうなんだけど……あはは」
頭をかきながら、ばつが悪そうに笑うロバーツ。
ロバーツ自身も、当然だが責任問題に発展した。いくら脅されていたとはいえ、≪エイオンシステム≫という重要機密

を上層部の許可無く漏洩したことは重大な過失だったからだ。

だが、導力ネットワークの責任者として代わりの人間が簡単には見つからないことと、ティオやヨナが事情を説明したことにより、情状酌量の余地があると判断され、数ヶ月間の減給という異例の軽い処分で済んだのだ。

「いやぁ、ティオ君やヨナ君が証言してくれたと聞いた時は、本当にうれしかったよぉ～！」

そう言いながらニコニコするロバーツ。その笑顔を見つめながらティオは、

『今さら新しい上司が来て、その人と人間関係を一から構築するのはめんどくさいです』

という思惑でロバーツをかばったことは黙っておこう、とそっと心の中で決めたのだった。

「まあ、結果としては」

ティオはそこで言葉を句切り、お茶をひと口、ずずーっとすする。ほぅ、と味を堪能してから続けた。

「ヨナと主任に大きな貸しがひとつずつできた……ということですね」

ヨナの抗議の声を右から左に聞き流しつつ、ティオはお茶を飲み干した。

ティオの章（後編）　了

Falcom FanArt Collection

数々の名作で多くのファンを生み出してきた日本ファルコム。
FFCでは、そんなファルコムを愛するイラストレーターの方々のイラストとコメントを毎月お届けします！



瑞乃はるひ

PSPもPCEもプレイしましたが、やはりPC版が一番印象に残っています。フルマウス操作のおかげで上達しました。これからも大事にしたいシリーズです。

『ブランディッシュ』（1991）

主人公・アレスを操作して、障害物や罠が仕掛けられた多数のエリアを攻略するアクションＲＰＧ。全ての行動がマウス操作であり、リアルタイムで進む謎解きや即死の罠など緊迫感のあるゲーム性が人気だ。

▶▶▶零＆碧の軌跡◀◀◀ イラストコンテスト ファルコムマガジン大賞が決定!

今回のイラストコンテストから設立された「ファルコムマガジン大賞」。
その受賞者を本誌が世界最速で大発表！　栄冠を手にしたのは……!?



おのさん

受賞コメント

沢山の素敵な作品の中から、大賞にご選出頂けたとのことで至極恐縮に思います。(投稿時に、徹夜明けのテンションでコメント添付したことに今更後悔です…。)

イラコンに参加するのは今回で3度目になるのですが、また今回も私にとってすごく良い刺激になったので、これからも前向きに作品作っていきたいと思います！ これからもワジくんぺろぺろします！　ありがとうございました！

ファルコムマガジン大賞を受賞したおのさんとのコラボ企画はVol.14にて発表!

連載作家からお祝いのコメントが到着！

啄木鳥しんき
ワジ君に食べ物をとられないように（？）眼で牽制するリースの様子が好きです。存在感のある総長も素敵です。

新久保だいすけ
細かい所までとてもいい雰囲気のイラストですね！　さすがのケビンもこの面子に囲まれて苦労してそう（笑）

楽時たらひ
リースさん逃げて！　二人くらいの人物が（クッキーを）狙っていますぅぅ！

■4コママンガ部門

料理の鉄人



●大賞 Jyunさん

神狼ツァイトと装備品



●優秀賞 PARUSさん

攻略中



●優秀賞 かずぃさん

■イラスト部門



●大賞 内蔵助さん



●優秀賞 nemiさん



●優秀賞 じょうさんさん

3部門の大賞・優秀賞はコチラ!



●優秀賞 よりおさん

■ラクガキ部門



●大賞 ナオコさん



●優秀賞 水上柚樹さん

THE LEGEND OF HEROES

零の軌跡 Evolution 情報課通信

ゼロノキセキ エヴォリューション

零えぽの情報をいち早くお届け!



待望の第一報が到着！ PlayStation®Vitaで、『零の軌跡』がさらなる進化を遂げる!

2月9日、六本木ニコファーレにて、PS Vita専用ソフトウェア『英雄伝説 零の軌跡』の制作発表会が行われた。そのタイトルはズバリ『英雄伝説 零の軌跡 Evolution』。まさにEvolution（進化）の名に恥じない『零えぽ』の魅力的な新要素を、第一報としてご紹介しよう！

■ 製品情報

英雄伝説 零の軌跡 Evolution
●プラットフォーム：PlayStation®Vita
●発売日：2012年8月（予定）
●ジャンル：ストーリー RPG
●CERO：審査予定
●価格：PlayStation®Vitaカード版 6,090円（税込）
ダウンロード版5,040円（税込）キャラアニ限定版 9,800円（税込）
●発売：株式会社角川ゲームス
●企画制作：日本ファルコム株式会社、株式会社キャラアニ
●開発：株式会社ピラミッド
公式サイト：http://www.zero-full.com/

『零えぽ』を盛り上げる6大進化ポイント!

その1 メインストーリーがフルボイス化！



PSP版では戦闘ボイスやシステムボイスのみの収録だったものが、今回メインストーリーがフルボイス化と大幅進化！ 新たにキャスティングされた声優陣にも注目だ！

その2 全楽曲がニューアレンジver.に！



ファルコム作品には欠かせない、シーンを盛り上げる楽曲の数々がニューアレンジver.に。さらには、jdkバンドの小寺可南子が歌う新曲『セルリアンブルーの恋』が追加！

その3 ムービーシーンの再構成



オープニングやエンディング、劇中のムービーシーンが描き下ろしの新規アニメーション映像に進化！ 感動のドラマをさらに盛り上げてくれること間違いなしだ。

その4 新たな支援要請の追加



『軌跡』シリーズの醍醐味ともいえる支援要請（サブクエスト）もボリュームアップ！ 大都市クロスベルで暮らすアノ人（!?）に関する支援要請も!?

その5 キャラクター、ビジュアルを総リファイン



PS Vitaへプラットフォームが変わったことで、グラフィックも大幅進化！ キャラクターや各種エフェクトが高解像度で楽しめるほか、新たな画面効果も追加されているぞ。

その6 PS Vitaならではのミニゲームが追加！



PS Vitaが持つ、タッチスクリーンやモーションセンサー、背面タッチパネルといった特性を活かしたミニゲームも新規収録。部屋のインテリア集めがより重要に!?

キャラアニ限定BOXは豪華特典が満載!

『零えぽ』をファルコムとともに企画・制作しているキャラアニでは、豪華特典が満載の限定BOXを受注・予約中だ!

キャラアニ限定BOX





キャリングポーチ＆クロス
※デザインはイメージです



サウンドトラックCD
※先着購入特典とは収録曲が異なります



オリジナルドラマCD

キャラアニ公式ページはこちら！



ねんどろいどぷち アリアンロード

英雄伝説 空の軌跡 ソラノキセキ THE ANIMATION

遊撃士協会 アニメ支部

アニメ版『空の軌跡』の最新情報を毎号レポート！

エステルとヨシュアの物語を描いたOVAがついに完結!

全２巻で『英雄伝説 空の軌跡』をアニメ化した、OVAがついに完結。本誌でインタビューした際に橘正紀監督が述べていた通り、長い『空』のエピソードが、見事に「エステルとヨシュア」に焦点を当てた形で描かれているぞ。囚われのエステルを救うため、結社の巨大戦艦・グロリアスへ向かったヨシュアと、彼を待ち受けていたレーヴェの一騎打ちは圧巻のひと言。BGMはもちろんアノ曲だ。



■製品情報
「英雄伝説　空の軌跡　THE ANIMATION」vol.2
BD初回限定版はオリジナルサウンドトラックCD付き！
<BD通常版・DVD通常版 共通特典>
封入特典：特製ブックレット（16P）
映像特典：第1話ダイジェスト、ノンクレジットOP&ED、オーディオコメンタリー
BD初回限定版 ￥8,190(税込)
BD通常版 ￥6,090(税込)
DVD通常版 ￥5,040(税込)
(全２巻シリーズ)
販売元：バンダイビジュアル
【公式HP】 www.sora-anime.com
【スタッフ】
監督：橘 正紀　シリーズ構成・脚本：上江洲 誠　キャラクター原案：日本ファルコム　キャラクターデザイン・総作画監督：野崎あつこ　アニメーション制作：キネマシトラス
【キャスト】
エステル・ブライト：神田朱未　ヨシュア・アストレイ：斎賀みつき　シェラザード・ハーヴェイ：塩山由佳　オリビエ・レンハイム：子安武人　ティータ・ラッセル：今野宏美　クローゼ・リンツ：皆口裕子　レオンハルト：緑川 光　レン：西原久美子　ルシオラ：西川宏美　カンパネルラ：伊藤かな恵　ほか









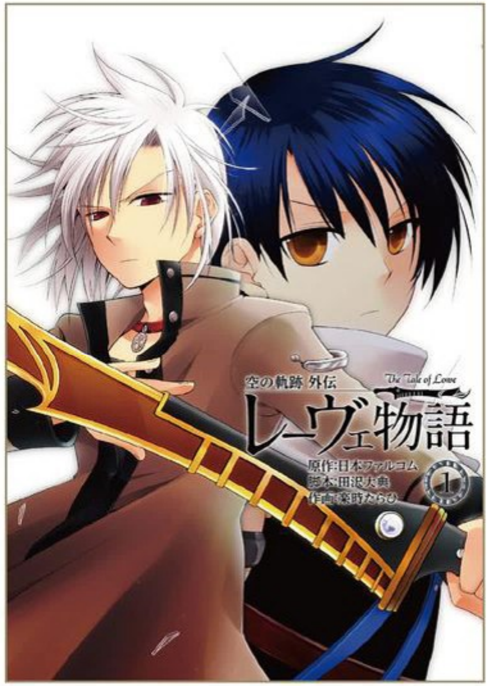


▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

『空の軌跡外伝 レーヴェ物語』の単行本第1巻が3月19日に発売!

本誌で好評連載中の、『英雄伝説 空の軌跡』を剣帝・レーヴェの視点から描いた漫画『空の軌跡外伝 レーヴェ物語』の単行本第1巻が３月19日に発売！　ゲーム本編では深く掘り下げられていなかった、レーヴェの苦悩や想いが細やかに描かれた一冊になっているぞ。第1巻では、レーヴェがリベール王国軍のリシャール大佐と出会う第六話までを収録。893円（税込）。

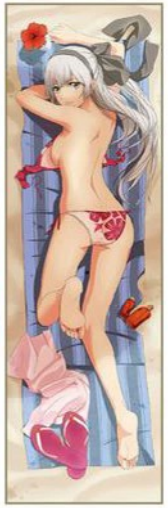


エリィお嬢様がなんと抱き枕カバーに!? 描き下ろしイラストは破壊力抜群!

『英雄伝説 零の軌跡／碧の軌跡』のヒロイン・エリィがなんと抱き枕カバーになって登場！　描き下ろしイラストの表面は、エリィの寝起きのワイシャツ姿。裏面はサンオイルを塗ってもらうところ（？）の大胆な水着姿になっているぞ！　３月13日までの予約受注生産販売なので、ゲットしたい人は今すぐ予約サイトにアクセス！　12,600円（税込）。

[予約サイト]
http://www.red-store.jp/aonokiseki/





ファルコムのぬいぐるみシリーズ「ぬいぐるみん」第１弾はティオ!

ぬいぐるみん





日本ファルコムのぬいぐるみシリーズ「ぬいぐるみん」が５月中旬からスタート！　第１弾として、『英雄伝説 零の軌跡／碧の軌跡』が登場！　今後のラインナップにも期待大！　予約特別価格2,079円（税込）。通常販売価格2,814円（税込）。

[予約サイト（ファルコム通販）]
http://www.falcom.co.jp/mailorder/catalog/y95.html

人生半キャラずらし

jdkバンドのドラマー・オカジがファルコムと音楽と人生について熱く語ります！

MUSIC FROM Ys（ミュージック・フロム・イース）



岡島俊治（Okaji）

1979年6月9日生まれ
ドラマー/パーカッショニスト/作曲、編曲家/プロデューサー
洗足学園短期大学器楽科打楽器専攻卒業。
2000年、ロックバンド『HeadPhonesPresident』のドラマーとしてデビュー。
2005年、同バンド脱退後はフリーミュージシャンとしての活動を開始。様々なアーティストのサポート、レコーディング、プロデュース等を行う。
2008年より『ファルコムjdkバンド』に参加。
主な共演歴：jdk BAND、Sixh.Opera、HeavensDust、野宮真貴、植村花菜、CORE OF SOUL、DENIAL、安藤禎央、清田愛未、中村幸代、一純悠人、momokomotion、越尾さくら…etc



どうも皆様こんにちは、jdkバンドドラマーのオカジです。なんとこの度、ファルコムマガジンに連載を持たせて頂く事になりました。嘘みたいな話ですが本当です。しかも内容は、僕が好き勝手にファルコムの音楽について語れば良いとの事……。まぁ、おそらく、行き当たりばったりの体当たり（半キャラずらし）的なコラムになってしまうかとは思いますが、おつき合い頂ければ光栄でございます。さてさてそんなわけで早速本題に入って行きましょう。

まず第一回目のテーマは『ミュージック・フロム・イース』。

何故かって？　それは何を隠そう、僕が生まれて初めてファルコムサウンドに触れたのがこの作品だからなのです。僕と『イース』との出会いは、小学校三年生の頃でした。当時の僕はというと、とにかく寝ても覚めてもTVゲームに明け暮れる、酷いインドア系オタク小学生で、ファミコンをやるために親を騙して学校を休むというような、悪行の限りを尽くしていたわけです。

そんなある日、しょっちゅう一緒にゲームをやっていた大親友の家に遊びに行くと、その友人のお兄さんが、見たこともない機械でゲームをやっているではないですか。それは「パソコン」と呼ばれる白い箱型の機械で、当時の僕はそんなものの存在すらも知りませんでしたが、その画面に映し出されていた映像と音楽は、僕の知っているゲームの常識をはるかに超越したものであったのです。あまりに衝撃を受けた僕は思わず、お兄さんにこう聞きました。



「こ、これ、なんていうゲームなの……？」

「あ、これは『イース』っていうゲーム。今クリアしたところで、これはエンディングなんだよ」

夜明けにそびえ立つダームの塔とともに流れる『THE MORNING GROW』。

……この体験が僕の人生の夜明けになった事はいうまでもありません。

そのお兄さんはカセットテープで『ミュージック・フロム・イース』も持っていて、『イース』の世界にハマってしまった僕は、彼に貸してもらったテープを、小さなモノラルのラジカセで聴きながらお茶碗を叩いたりしていたわけです。当時は（今でもだけど）、『FIRST STEP TOWARDS WARS』や、未使用曲の『DREAMING』がお気に入りだったなぁ。あと『TOWER OF THE SHADOW OF DEATH』も。

しかしお茶碗を叩いていた自分が、まさか20数年後にjdkバンドのドラマーとしてステージに立つとは思いもよりませんでした。人生何が起こるかわからないですね！

また次回お会いしましょう！



ファルコム楽曲4,000曲をiTunesで世界50ヶ国に配信中。

(ファルコム楽曲はすべて高音質化、DRMフリーが適用されたiTunes Plusでの配信となります)

[MUSIC FROM Ys]
価格：900円　収録曲数：39曲

[Music From Ys I&II Chronoicles(PC-88 mode)]
価格：1,200円　収録曲数：80曲

※PSPタイトル「Ys I&II Chronicles」の制作にあたって1から録音し直された音源を収録しています



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.13

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 大場恵美子
デザイン・DTP	さとうだいち
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（ビーニーズ）
発行	株式会社フィールドワイ 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/
制作・販売協力	シナノ印刷株式会社